

中国変容論

食の基盤と環境

元 木 靖



海青社

中国変容論

食の基盤と環境

元 木 靖



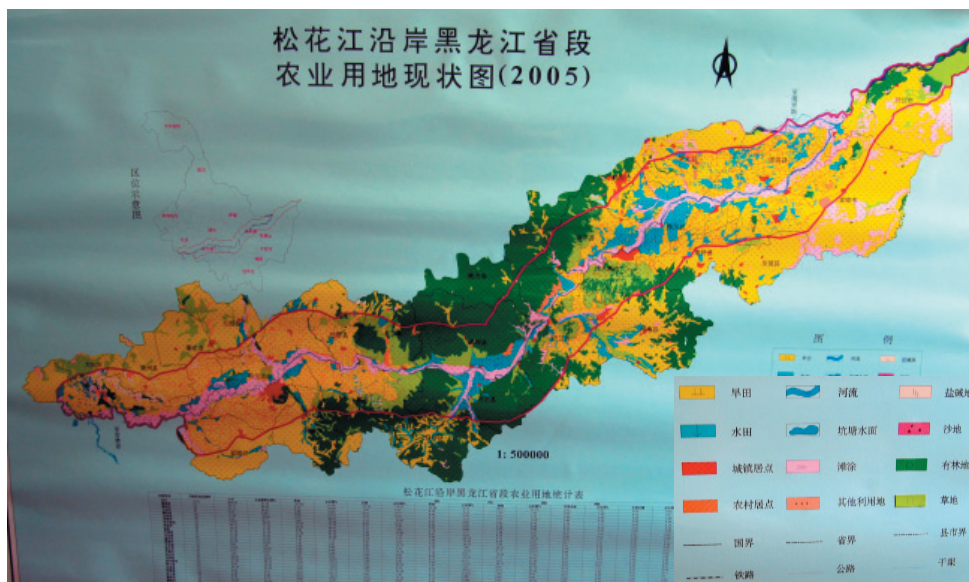
海青社



都市化がすすむ中国で深刻化する環境汚染。写真は2010年に開催された上海国際博覧会の会場に展示されたもので、林立するビル群と多様なゴミの山のモザイク。陸域の環境汚染は海洋の汚染にも深刻な影響を及ぼしている。



経済発展が中国でもっとも著しい上海市と周辺の景観。写真(上)は上海近郊の新しい農村住宅(左)と、近代化した上海の中心部の様子(右)。写真(下)は上海近郊の農村住宅と整備された農地景観(左)と長江デルタを特徴付けてきたクリークに架けられた新旧の橋(右)。



写真(上)は中国最北の食糧基地である黒龍江省松花江沿岸の土地利用図(東北農業大学提供)。広大な畑(旱田)地帯のなかで河川沿いには水田が分布する。三江平原の佳木斯市周辺の国営農場には大規模な水田が開かれている。写真(中)は内陸の大安市における伝統的土地利用(左)と新規開田地(右)。土地は平坦であるが、アルカリ性土壌が発達しており農地の開発が妨げられてきたが、1989年に中国科学院の長春地理研究所による水稻の試験栽培が開始されてから、水田化が進められてきた。写真(下)は中国南部の福建省の惠安县に建てられた耕地保護の看板。以前の国家主席の名前が記されている。海岸沿いの平野は狭く、都市化・工業化が進んでいるため耕地保全は厳しい状況下にある。



新疆ウイグル自治区は天山山脈によって北疆と南疆に大きく二分される。写真(上)は北のジュンガル盆地側から天山の東部を望んだ風景。中央の氷河を抱いた高位部が博格達峰(5,445m)。写真(下)は南のタリム盆地側からみた緑洲(オアシス)とその背後の植生のない丘陵地帯。灰白色の三角末端面の前面に緑洲が広がっているのが分かる。



写真(上)は遊牧社会の様子。大量の家畜を少数の牧民が管理している(左、天山山中)。鷹匠を営む勇壮な人々も暮らすが、近年高齢化が進んでいる(右、グルジャ県)。写真(下)は農耕社会の様子。灌漑水路に堆積した土砂(左)と共同で水路の泥上げ・改修に向かう農民たち(右、アクス地区)。



中国南部雲南省の高地に位置する紅河自治州元陽県の様子。写真(左)は元陽県の旧自治政府所在地の中心街。写真(右)は近年の土地利用変化の例で、棚田(中国語: 梯田)に竹が植えられた様子である。



写真(左)はハニ族の衣装を着た女性。背後の図柄にはハニ族文化を象徴する太陽が描かれている(元陽県箐口村にできたハニ族の展示館)。ここには棚田の成立について絵図が展示されている。写真(右)はさまざまな漬物、コンニャク、紅米で作られた麺(元陽県南沙の市場)。ハニ族の伝統食には日本の伝統食と似たものが少なくない。

世界を理解するのに必要なのは細切れの知識ではない。
あらゆる分野が有機的につながって歴史を編むのだと
知ることである

————— クリストファー・ロイド
(Christopher Lloyd)

未来に対する健全な判断を形成する点で助けとなるのは、
予測技術よりも十分な現状理解である

————— シューマツハ
(E. F. Schmacher)

はしがき

私が最初に中国の土を踏んだのは1985年であった。振りかえってみるともう28年になる。4つの現代(近代)化政策を掲げて出発した中国では、当時すでに人民公社はほとんど目にする事はなかったが、伝統の姿は随所に色濃く残っていた。私はそれ以来今日まで、中国の大地と人々の暮らしぶりに触れてきた。とはいえ、広大な中国のどこから手を付けてよいか試行錯誤の連続であった。ただ、私は農村出身であったためか、フィールドに出てみるとあまり違和感をもたずに社会に入り込むことができたように思う。社会主義の制度や、秘密主義の雰囲気には手こずったが、ちょうど日本が戦後の窮乏期を経て高度成長の時代とその後の状況を見続けてきたこともあって、中国の変化を予想することができたことも幸いした。そうして、中国の伝統と変化の方向性についておぼろげながら、自分なりの印象を持てるようになった。中国の人々が世の中が変わりゆくのをどのように見、それをどのような問題としてうけとめ、どのような事を期待しているのか、また人々の価値観や生活様式が実際どのように変わってきたか、それらは日本と比べてどのようなところに相異点があるのかについても気づかされ、意識するようになった。

その成果の一端は日本の学会や研究会で報告し、また中国側との交流会などで意見交換をしてきた。こうした中で学んできたことをも踏まえ、ささやかであっても学術的な見地から世に問うてみることの責務と意義があるのでないかと思うようになった。次に掲げた地図は観光以外にこれまでに調査らしいことを行った場所を含む、一級行政区名と年月とを示したものである。そのうちからいくつかの柱を立てて作成したのが本書である。

本書の内容は大きく4編で構成した。第Ⅰ編「水」は長江流域における都市の立地と水をベースとした、環境史的研究である。第Ⅱ編「土地」は人間活動の変化と土地(=耕地)資源との関わり合いに関する研究である。第Ⅲ編「食糧」は経済改革以降の産業構造調整と食糧生産地域の構造変容に関する研究である。第Ⅳ編「環境」は急速な経済成長(都市化)の背後で引き起こされてきた地域環境の変化に関する研究である。



フィールドワークを実施した一級行政区と時期

(本書に収録した事例：枠線で囲んだ域内)

本書は、各編の柱とした「水」「土地」「食糧」「環境」のキーワードから明らかに、水と土地の上に成り立つ人間の生存基盤としての農業(食糧と環境)に関することを取り扱っている。しかし農業問題それ自体の追求を意図したのではない。現代の文明社会を特徴付ける根源としての「都市」の発生・発展ということを意識し、一貫して中国農業の過去および今日の流れを見通すことによって、変容する中国のイメージを浮きぼりにすることを心がけた。この点に本書の特徴がある。世界全体がいま、ますますグローバル化する中であって、中国は私たちが日本で経験してきたときと比べてはるかに速いスピードと規模で変化してきた。中国のGDP(国内総生産)が日本を追い越し、アメリカに次いで世界第2位になったという最近のニュースは、初めて中国に行ったときには想像することもできなかった。こうした急激な変化が中国の人々のエネルギーや安い労働力に支えられてきたとしても、新しい近代化の手法(海外から

の直接投資と技術進歩)に大きく依存して実現し得たことは疑いのないところであろう。その意味で、中国の変わり方や問題の現れ方には、都市化に向かって邁進する現代社会の特質が色濃く映し出されているようにも思われる。日本が近代化の過程で失い背負ってきた諸問題が中国では解消される方向に変わっているのか、それともやはり繰り返されるのか。未来を展望する上で、中国は世界の実験場とみることができよう。その意味では本書は中国に関するものであるが、日本に向けた書でもある。

私の中国研究では、これまでに文部科学省および日本学術振興会の科学研究費補助と海外派遣助成、環境省の研究助成を受けたこと、そして旧勤務先の埼玉大学と現在の立正大学の協力等を得て、何度も現地調査の機会を持つことができた。中国では各地の行政機関、大学、研究所、そして数え切れないくらい多くの人々にお世話になった。そのすべての機関や人々の名称を記すことはできないが、とくに以下の方々に対して感謝の意を表したい。まず、埼玉大学時代の在外研究の期間中にお世話になった北京大学地理系(現・城市与环境学院)の胡兆量先生にまず御礼申し上げねばならない。先生にはその後の調査の際にも各地の大学や研究所の紹介や文献収集等あらゆる面で協力していただいた。北京大学の林雅貞先生と当時学生であった劉繼生氏(現・創価大学准教授)、中国から国費留学生として初めて埼玉大学にこられた岑云华氏から得た援助と友情も忘れがたい。

また調査に同行いただいた東北農業大学の秦智偉教授(現・副学長)、中国科学院東北地理農業生態研究所の張柏所長(当時)、中国科学院地理科学資源研究所の欧陽竹教授、新疆師範大学のパルハティ(Parhat)氏(現・新疆旅游局副局长)、山東建築材料学院(現・山東大学)の劉金生氏、四川大学の郭声波教授、三星堆遺跡考古研究所の陳徳安所長、湖南師範大学の周宏偉教授、ビラルディン・ニザム氏(現・オーストラリア図書館勤務)、さらに中国科学院山地災害環境研究所、哈爾濱師範大学、東北師範大学、延辺大学、新疆師範大学、山東師範大学、湖南大学、華東師範大学、蘇州科学技術大学、嘉興師範学院等の機関では特別にお世話になった。

また日本の多くの中国研究者からも刺激を受けてきた。その中で長江文明の

探求に取り組んでこられた国際日本文化研究センターの安田喜憲(現・東北大学教授)、国際的な視点から土地利用・土地被覆研究を続けている氷見山幸夫(北海道教育大学教授)、大坪国順(上智大学教授)、(独)国立環境研究所の陸海域環境管理研究における木幡邦男(現・埼玉県環境科学国際センター長)、村上正吾、王勤学、越川 海の各氏とは現地において調査を共にし、貴重な示唆を受けた。また中国研究に多くの業績を残してきた石原 潤先生(京都大学名誉教授)からはさまざまな形で激励をいただいた。さらに資料整理では栗原一行氏(内外交易株式会社)にお世話になった。

立正大学では中国をベースに世界資本主義論を展開されている五味久壽教授、および中国から世界に研究対象を広げ実証的な経済学研究を実践されている苑志佳教授のご研究から教えられることが多かった。立正大学大学院経済学研究科には中国からの留生が多く、彼らと学び合ったことも私の中国理解に役立った。

最後に、本書は立正大学経済学部には附属する経済研究所の「研究叢書」として助成を受け刊行されることになった。日頃お世話になっている小野崎 保学部長、小畑二郎経済研究所所長はじめ経済学部のスタッフ一同に感謝申し上げたい。出版に当たっては海青社社長の宮内 久氏にご快諾いただき、編集部の福井将人氏にはやっかいな図版の調整などでたいへんお世話になった。深く御礼申し上げる次第である。

平成 25(2013)年 2 月 14 日

著 者

本書を父(重夫)と義父(豊崎 卓)に捧げたい。

2人ともすでに故人となったが、父は第二次世界大戦中2度大陸にわたり、当時の中国事情を私の幼少時に何度も語ってくれた。東洋史研究に情熱を傾け、古代中国の制度の影響が常陸国に現れていることを検証してきた義父(茨城大学名誉教授)との対話も思い出深い。休みには調査で外出することが多い中で、日頃家を守り、研究生活を支えてくれている妻敏子と母喜代、そして子供たちにもこの機会に謝意を表したい。

中国変容論

食の基盤と環境

目 次

本文中のルビは、各章に初出の省や自治区などの一級行政名称、およびその他最小限必要と思われる難解な人名および地名に付した。ルビの表記は原則として、一般的に日本の音読みが通用している文字には「ひらがな」を用い、それ以外の特殊なあるいは日本の音読みが一般化していない文字については、中国の拼音(pinyin)にしたがって「カタカナ」を用いた。

口 絵	i
は し が き	1
図・表・写真一覧	11
序	17
1. 基本的視点	17
2. 従来の研究	18
3. 目的と方法	20
4. 本書の構成	21
第 I 編 水——長江流域における早期都市の立地と水利の環境史——	25
第 1 章 長江上流域——成都平原・三星堆遺跡周辺の灌漑水利変容——	29
はじめに	29
第 1 節 成都平原北部に発生した三星堆文明	30
第 2 節 三星堆遺跡の立地環境と農村の現況	35
第 3 節 三星堆遺跡周辺の伝統的農業水利の変容	42
むすび	52
第 2 章 長江中流域——瀘陽平原・城頭山遺跡周辺の灌漑水利変容——	57
はじめに	57
第 1 節 城頭山遺跡周辺の原初的稲作をめぐる議論	60
第 2 節 伝統的水利の特徴としての池沼の役割	64
第 3 節 伝統的水利技術の成立と持続性	71
第 4 節 瀘陽平原における水利方式変革の方向	76
むすび	79
第 3 章 長江下流域——太湖平原・良渚遺跡周辺の灌漑水利変容——	83
はじめに	83
第 1 節 良渚文明の性格と生産的基盤	86

第2節 良渚遺跡の立地環境とクリーク方式萌芽の可能性.....	91
第3節 長江デルタの造盆地構造と人間居住の関係.....	100
第4節 太湖平原におけるクリークをめぐる諸論の検討.....	103
むすび——クリークをめぐる新しい動き.....	110
第Ⅱ編 土 地——人口圧と農地開発／都市化と土地資源問題——	115
第4章 人口と農業・土地資源の関係	117
はじめに.....	117
第1節 人口と農業との関係.....	117
第2節 人口増加と耕地の零細化.....	120
第3節 農村改革と地域経済の不均等発展.....	121
第4節 人口圧の背景となった地域間人口流動.....	124
むすび.....	126
第5章 経済改革初期段階の土地資源問題	129
はじめに.....	129
第1節 過去における土地(＝耕地)資源問題.....	129
第2節 経済改革期における耕地面積の減少.....	131
第3節 耕地減少を引き起こした要因.....	132
第4節 特徴的な事例——レンガ製造による耕地の破壊——.....	134
むすび.....	136
第6章 経済成長期の都市化と土地資源問題	139
はじめに.....	139
第1節 農地減少の要因としての都市化.....	140
第2節 東アジアにおける都市化と耕地減少.....	144
第3節 中国における都市化が耕地に及ぼす影響.....	148
第4節 土地保全政策の強化と土地資源の行方.....	157
むすび.....	160

第Ⅲ編 食 糧——市場経済下の産業構造調整と食糧生産地域の変容—— ..165

第7章 構造調整の概念と中国農業構造調整のプロセス	167
はじめに	167
第1節 農業構造調整の内容の多面性	167
第2節 中国農業の構造調整プロセスと食糧生産	169
第3節 農業構造調整の新局面	174
むすび	177
第8章 中国における食糧生産構造変化の特徴	181
はじめに	181
第1節 食糧生産の構造変化	181
第2節 三大穀物の「南方-北方」の比重の変化	184
むすび	187
第9章 東北地区における食糧生産の地域的展開	189
はじめに	189
第1節 食糧作物生産への傾斜	189
第2節 食糧作物生産における地域構造の変化	192
第3節 水稻作の北進	195
第4節 食糧生産における「新東北現象」	197
むすび	198
第10章 吉林省におけるトウモロコシを主とした農業的土地利用形成の分析	201
はじめに	201
第1節 トウモロコシを主とした土地利用形成の史的背景	202
第2節 トウモロコシを主とした土地利用展開の地域的特徴	205
第3節 複合的土地利用地域の変容——吉林省東部地区の実態——	210
むすび	216

第 11 章 黒龍江省における農業的土地利用の展開と水稻作発展の意義	219
はじめに	219
第 1 節 水稻作を基軸とした急速な農業発展	219
第 2 節 農作物分布の地域構造の変化	222
第 3 節 水稻作発展地域の実態分析 —— 松嫩平原の例 ——	226
第 4 節 水稻栽培発展の諸相	228
第 5 節 水稻作を促進した要因と制約要因	238
むすび	240
第 12 章 WTO 加盟前後の食糧生産地域の構造変化と課題	245
はじめに	245
第 1 節 WTO 加盟前後における農作物配置の変動	246
第 2 節 長江デルタと東北地区の対比 —— 産業構造変化 ——	249
第 3 節 長江デルタと東北地区の対比 —— 農作物栽培面積の動向 ——	252
第 4 節 両地区における農作物展開の地域的性格	253
第 5 節 食糧生産の当面の目標 —— 水稻作地の景観 ——	256
むすび	259
第Ⅳ編 環 境 —— 急速な経済成長に伴う社会の変容と地域環境問題 ——	261
第 13 章 経済成長と低地帯の水汚染問題の生成構造 —— 長江デルタ ——	263
はじめに	263
第 1 節 長江デルタの経済成長と農業・農村の変容	263
第 2 節 長江デルタの水環境問題と検討すべき課題	266
第 3 節 農業構造の変容と河川水質悪化の相互関係	267
第 4 節 後進性の問題と水環境汚染の生成メカニズム	274
むすび	277
第 14 章 乾燥世界の地域変容と水利競合 —— 新疆ウイグル自治区のオアシス ——	279
はじめに	279

第1節	乾燥世界におけるオアシスの重要性.....	279
第2節	オアシスを左右する水と人口と経済.....	281
第3節	オアシス農業と社会変化への対応——水稲作に注目して—— ..	284
第4節	新疆農業の土地利用変化にみる、水-人間関係の変化	289
むすび		291
 第15章 農耕社会の変容と牧畜社会の草原破壊		
	——新疆ウイグル自治区グルジャ県——	293
	はじめに	293
第1節	グルジャ県の立地環境.....	293
第2節	農耕社会と牧畜社会の農牧業の変容過程	296
第3節	農耕社会と牧畜社会の関わり合いの緊密化	302
第4節	過度放牧と草原破壊の諸相.....	305
むすび		316
 第16章 棚田世界の地域変容と貧困化問題——雲南省紅河自治州元陽県——		
	はじめに	319
第1節	元陽県の立地環境	319
第2節	棚田の分布領域.....	323
第3節	棚田世界の維持機構と変容.....	328
第4節	棚田の世界のゆくえ	330
第5節	貧困化問題と観光化.....	332
むすび		338
 終 章		
索 引		345
初出一覧		359

図・表・写真一覧

序	17
第1章 長江上流域——成都平原・三星堆遺跡周辺の灌漑水利変容——	29
図 1-1 対象地域	30
図 1-2 成都平原の地形と文明移動の概念図	33
写真 1-1 三星堆遺跡外壁の断面(版築構造)	35
図 1-3 三星堆遺跡周辺の表層地質と地下水分布状況(広漢市西南部)	36
図 1-4 三星堆遺跡周辺の地形	37
写真 1-2 三星堆遺跡周辺の様子	38
写真 1-3 脱穀作業	41
写真 1-4 稲穂の乾燥	41
図 1-5 成都平原における 1950 年頃の灌漑水利の地域差	43
図 1-6 成都平原の水利システム	44
表 1-1 都江堰による灌漑面積の拡大	45
表 1-2 都江堰受益地域における糧油生産量	45
写真 1-5 成都平原における伝統的な水利(揚水)技術	47
写真 1-6 筒車(広漢市水利局提供)	48
写真 1-7 都江堰から末端水田までの用水システム	49
写真 1-8 水田景観	50
表 1-3 広漢市における食糧生産の動向	51
第2章 長江中流域——瀘陽平原・城頭山遺跡周辺の灌漑水利変容——	57
図 2-1 中国大陸における気候変化と稲作文化	57
写真 2-1 円形をした城頭山遺跡と環濠の景観	59
写真 2-2 城頭山遺跡の展示館に掲げられた古代稲作の想像図	62
写真 2-3 城頭山遺跡の城内から発見された水田、水坑(水溜)と水路、祭壇	63
図 2-2 瀘陽平原と城頭山遺跡の位置	64
図 2-3 洞庭湖区県市の地形構成	65
写真 2-4 ため池(長沙周辺)	66
図 2-4 瀘県における池沼の3類型	67
表 2-1 瀘県における池沼分布の地域性	68
図 2-5 城頭山遺跡周辺の地形 = 等高線分布(上)と池沼分布(下)	69
写真 2-5 城頭山遺跡周辺の池沼と農家生活景観——車溪郷宝寧村——	70
写真 2-6 龍骨車の復元	73
図 2-6 漢代と近代の龍骨車	73
写真 2-7 瀘陽平原に基幹的水利システム	76
図 2-7 常德市における水稻単収の変遷	78

第3章 長江下流域——太湖平原・良渚遺跡周辺の灌漑水利変容——	83
図 3-1 長江デルタの太湖平原	84
図 3-2 杭州湾両岸の新石器時代の遺跡分布	87
写真 3-1 良渚遺跡群の中心・大莫角山遺跡と神人獣面紋	88
図 3-3 良渚遺跡群周辺の地理的環境	92
写真 3-2 良渚遺跡周辺の農村景観(2000年)	97
図 3-4 良渚鎮周辺の水路網と集落配置	98
図 3-5 良渚鎮周辺農村の都市化	99
図 3-6 長江デルタの地形環境の模式	101
図 3-7 五代呉越時代の塘浦圩田概略図	107
図 3-8 長江デルタの開発と農業水利の変容過程(試案)	110
第4章 人口と農業・土地資源の関係	117
表 4-1 中国における耕地面積と人口の変遷	120
表 4-2 主要国の一人当たり耕地面積の比較	121
図 4-1 中国における省間人口流動	125
第5章 経済改革初期段階の土地資源問題	129
表 5-1 中国における北方と南方の人口比率の変化	131
図 5-1 中国における経済改革期の耕地動向と土地関連法令	132
表 5-2 中国の経済改革期における耕地面積の減少要因	133
表 5-3 中国における地域別都市内耕地面積率の比較	134
写真 5-1 レンガ製造のために潰廃される農地	136
写真 5-2 比較的大規模なレンガ工場	136
第6章 経済成長期の都市化と土地資源問題	139
図 6-1 農地減少に影響する諸要因	141
図 6-2 米作における労力不足下の農業変化の経路	142
表 6-1 東アジアの都市化(都市人口率)	145
図 6-3 耕地面積の推移	146
表 6-2 最近35年間の耕地面積の増減傾向	147
図 6-4 中国の経済成長期における耕地面積の推移	149
図 6-5 中国の経済成長期における耕地の拡張	150
図 6-6 中国の経済成長期における耕地の潰廃	150
写真 6-1 退耕還林と退耕還草(河北省張家口市康保県)	151
図 6-7 2003年中の耕地面積の増加(上)と減少(下)	153
図 6-8 2008年中の耕地面積の増加(上)と減少(下)	154
図 6-9 都市化率と耕地率の相互関係	155
図 6-10 都市化率と人口一人当たり耕地面積の相互関係	155
図 6-11 都市化率と一次産業人口一人当たり耕地面積の相互関係	157

写真 6-2	土地管理法の制定後に作成されたポスター	159
写真 6-3	基本農田(優良農地)保全のための掲示	159
第 7 章	構造調整の概念と中国農業構造調整のプロセス	167
図 7-1	中国における人口と食糧生産の推移	170
図 7-2	中国の食料輸出と輸入の動向	171
表 7-1	中国における食料の輸出入	172
図 7-3	中国における穀物と食肉の消費量の推移	173
図 7-4	中国における農村住民の収入と支出	175
図 7-5	中国とインドの食糧の貿易構造——2001 年——	177
第 8 章	中国における食糧生産構造変化の特徴	181
表 8-1	中国における農作物播種面積の推移(1978-2001 年)	182
図 8-1	中国における食糧作物生産構造の変化——播種面積と生産量の比較——	183
図 8-2	中国における耕地の有効灌漑面積と化学肥料の使用量の推移	183
図 8-3	三大穀物の分布変動(1985-2001 年)	185
表 8-2	主要穀物の構成比の変化——北方と南方の比較——	186
第 9 章	東北地区における食糧生産の地域的展開	189
表 9-1	東北農業の地位	190
表 9-2	糧食作物に占める主要 3 穀物の比重の変化——東北 3 省と全国の比較	191
表 9-3	稲とトウモロコシの生産動向からみた東北の地位	192
図 9-1	東北における穀物生産の動向(1985 年 = 100)	193
図 9-2	東北における各省別地域構成——稲とトウモロコシの比較——	194
図 9-3	東北地区における水田の分布——1997 年——	196
図 9-4	東北 3 省における水稻生産量の変遷	197
第 10 章	吉林省におけるトウモロコシを主とした農業的土地利用形成の分析	201
図 10-1	吉林省における食糧作物の播種面積と生産量	201
表 10-1	吉林省における主要農作物生産量の変遷	202
表 10-2	吉林省における耕地利用の変遷	203
表 10-3	吉林省における主要農作物の単収の変遷	204
図 10-2	吉林省の地域区分	206
図 10-3	吉林省の地区別一人平均耕地面積	208
図 10-4	吉林省 3 地区別の食糧作物生産量構成の変化	209
図 10-5	吉林省 3 地区別の主要食糧作物生産の変化(1987-1998 年)	209
写真 10-1	吉林省東部の土地利用景観	211
第 11 章	黒龍江省における農業的土地利用の展開と水稻作発展の意義	219
図 11-1	黒龍江省における主要作物の変動指数(1980 年の播種面積 = 100)	220

図 11-2	黒龍江省における食糧作物生産の推移.....	220
図 11-3	黒龍江における主要作物の土地生産性の推移.....	221
図 11-4	黒龍江省における農業機械化の動向.....	221
図 11-5	黒龍江省における市区別の主要作物構成の分布(1999 年).....	223
図 11-6	黒龍江省における市区別の主要作物構成の分布(2008 年).....	223
図 11-7	黒龍江省における市区別の主要穀物構成の分布(1999 年).....	224
図 11-8	黒龍江省における市区別の主要穀物構成の分布(2008 年).....	224
図 11-9	調査地域——松嫩平原——.....	227
写真 11-1	海倫市東太村の景観.....	230
写真 11-2	綏化市の農村景観.....	232
写真 11-3	灌漑用水施設と開田地の稲作景観(前郭県).....	235
写真 11-4	乾燥低湿地の伝統的土地利用(左)と新規開田地(右).....	235
写真 11-5	アルカリ土壌地帯の養鴨(左)と土地整備(右).....	236
表 11-4	稲作展開を左右する諸条件——松嫩平原——.....	238
表 11-5	アルカリ性土壌農地整備率.....	239
図 11-10	農業機械化の動向(指数)——中国と黒龍江省の比較——.....	241
第 12 章 WTO 加盟前後の食糧生産地域の構造変化と課題.....		245
図 12-1	中国における農作物播種面積構成.....	245
図 12-2	中国における主要農作物の栽培面積の変化.....	246
図 12-3	中国における主要農作物分布の地域偏差(1995 年).....	247
図 12-4	中国における主要農作物分布の地域偏差(2010 年).....	247
図 12-5	対象地域の位置.....	249
表 12-1	東北地区 3 省と長江デルタ 3 市省.....	250
表 12-2	東北地区 3 省と長江デルタ 3 市省の比較.....	251
表 12-3	主要農作物面積の変化——東北地区、長江デルタ、全国——.....	252
図 12-6	農作物播種面積構成の変化——東北地区——.....	254
図 12-7	農作物播種面積構成の変化——長江デルタ——.....	254
図 12-8	東北地区と長江デルタにおける穀物種類別播種面積の変化.....	255
図 12-9	米生産量における東北と長江デルタの逆転.....	255
図 12-10	東北地区と長江デルタにおける稲作の変化.....	256
写真 12-1	黒龍江省の稲作景観.....	257
写真 12-2	蘇南地区の稲作景観.....	258
第 13 章 経済成長と低地帯の水汚染問題の生成構造——長江デルタ——.....		263
図 13-1	長江デルタにおける経済成長過程.....	264
表 13-1	長江デルタにおける産業構造転換過程と農業・農村.....	265
図 13-2	長江デルタの土地類型と調査対象地域.....	268
図 13-4	耕地面積の推移.....	269
図 13-3	長江デルタ 3 市の産業別生産額構成の推移.....	269

図 13-5	化学肥料使用量.....	270
図 13-6	水産品生産量.....	271
図 13-7	肉類(豚、牛、羊)生産量.....	272
図 13-8	上海・蘇州・嘉興3市の水質構成の推移.....	273
図 13-9	嘉興市の産業構造の変化と農業・農村の変化過程.....	275
図 13-10	全市水資源利用状況(2008年).....	276
図 13-11	嘉興市の農業変化(1990年 = 100).....	276
第14章	乾燥世界の地域変容と水利競合——新疆ウイグル自治区のオアシス——	279
図 14-1	新疆ウイグル自治区の地形.....	280
図 14-2	オアシス(緑洲)の概念図.....	280
図 14-3	新疆ウイグル自治区における水稻播種面積の分布.....	285
図 14-5	米泉県における穀物栽培面積の変遷.....	286
図 14-4	米泉市の地域区分と土地利用.....	286
写真 14-1	深井戸による地下水汲みあげ(灌漑)の様子.....	287
図 14-6	米泉県における農業用水の変遷.....	287
写真 14-2	「あきたこまち」を栽培する水田.....	288
図 14-7	新疆における主要農作物播種面積構成の変化.....	290
第15章	農耕社会の変容と牧畜社会の草原破壊——新疆ウイグル自治区グルジャ県——	293
図 15-1	グルジャ県の位置.....	294
図 15-2	グルジャ県の地形断面図(上)と南北縦断面(下).....	295
表 15-1	グルジャ県における農牧業(2001年).....	295
表 15-2	農耕社会と牧畜社会の比較(2001年).....	297
表 15-3	家畜飼養頭数の変化.....	299
図 15-3	グルジャ県における商品作物の作付面積の推移.....	301
図 15-4	グルジャ県における小麦とトウモロコシ生産量の推移.....	302
図 15-5	グルジャ県における家畜の飼育形式.....	304
表 15-4	グルジャ県における放牧可能家畜頭数の変化.....	305
表 15-5	郷・鎮別の草地使用面積と放牧可能家畜頭数.....	307
図 15-6	グルジャ県における一部の郷・鎮の草地分布.....	308
写真 15-1	自動車時代の草原破壊(2002. 9. 13).....	312
写真 15-2	山地牧畜民の生活拠点と家畜.....	313
第16章	棚田世界の地域変容と貧困化問題——雲南省紅河自治州元陽県——	319
図 16-1	元陽県の位置.....	320
写真 16-1	元陽県の県庁所在地.....	321
表 16-1	元陽県の気候.....	322
表 16-2	紅河自治州と元陽県の概要(2000年).....	322
表 16-3	紅河自治州の農民一人当たり現金収入.....	323

図 16-2	元陽県の標高と棚田の分布	324
図 16-3	大瓦遮河上流部における集落分布(上)と断面図(下)	325
図 16-4	者那珂河上流部における集落分布(上)と断面図(下)	326
写真 16-2	棚田世界の景観.....	327
図 16-5	ハニ族の棚田の世界	328
写真 16-3	棚田に植えられた竹	334
表 16-4	元陽県における農作物作付の動向.....	335
写真 16-4	民族村の入り口と伝統的住居と棚田景観	336

序

1. 基本的視点

本書は、第二次世界大戦後驚異的な経済成長を遂げた日本の立場から、日本以上のスピードと規模で経済発展を遂げている中国について眺めてみたいという、極めて素朴な問題意識に基づいている。戦後の社会主義国家・中国がその政治体制は維持したまま、1978年末から改革開放を旗印に現代化(近代化)政策をつづけ、2010年にはGDPで日本を追い越しアメリカに次ぐ世界第2位の経済大国に急成長した。恐らく、中国の人たちだけではなく世界の誰もが予測できなかったことではあるまいか。それほど今日の中国の変わりようは著しい。

「中国は今日の世界でもっとも重要な国々の一つであるが、恐らく次の百年間ではいろいろな面で、その中でもっとも重要な国になるであろう」。「中国がうまくいけばアジアがうまくいくし、中国がうまくいかなければアジアがうまくいかない」。

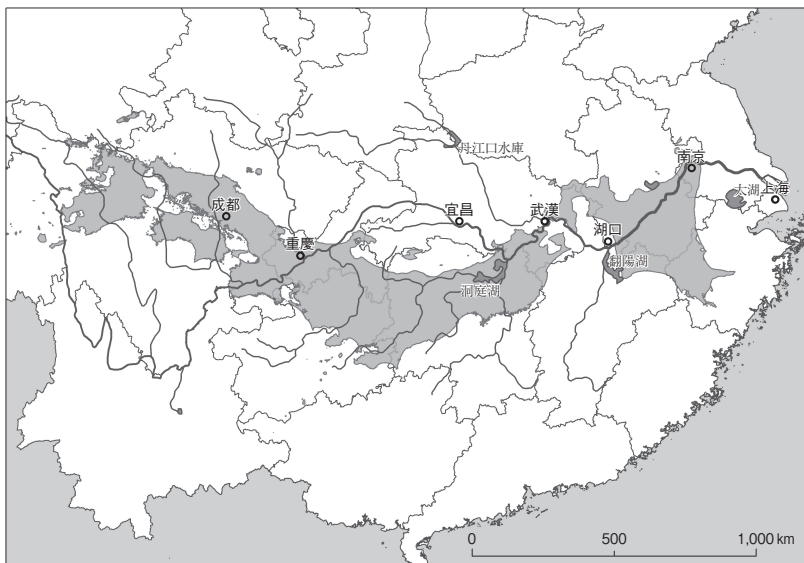
いまから65年前に、名著『中国—民族と土地と歴史—』(日本語訳:岩波新書、1950年)を出版したオーエン・ラティモア(小川訳1984)が、著書の冒頭で述べた言葉である。今日の姿を洞察しているだけではなく、21世紀のこれからの中国についてもそのまま当てはまりそうな印象を受ける。ただ、彼がこのように述べた背景は、世界史に大転換をもたらした第二次世界大戦後の中華人民共和国の成立に目を向けたものであった。日本語訳の監修をされた平野義太郎は、「アジアは数世紀の間、十数億の人民の政治的・経済的運命をアジアの外のものによって決定されてきた。しかるに、戦後では、アジア自身で形成される輿論、アジア自身でなされる決定が、世界に影響を及ぼしてゆく——中国がその典型である」、と述べた。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第 I 編

水

長江流域における早期都市の立地と水利の環境史



ミラー図法で投影したときに、日本をこの位置に移動回転させて作成した図

このプレビューでは表示されないページがあります。

第1章 長江上流域

—成都平原・三星堆遺跡周辺の灌漑水利変容—

はじめに

本章では、まず長江上流部において早期の都市文明として最も注目されてきた三星堆遺跡^{さんせいたい}を含む四川省成都平原^{しせんせいと}の事例について検討する(図1-1)。具体的には、稲作空間としての成都平原における早期都市(三星堆遺跡)の立地、およびその衰退後に中心性を強め今日まで持続的発展を遂げてきた成都市の存在に着目しつつ、同平原の環境史の一端を「灌漑水利技術」の側面から明らかにしたい。

灌漑水利、とくに伝統的に形成されてきた灌漑水利技術は、稲作文明社会発生以来の人間活動と土地自然との関わり合いを考える上で重要な指標である。もちろん、ここで「伝統的」灌漑水利とはいっても「三星堆遺跡」が成立した当時の状況に直接目を向けようとしているわけではない。それは不可能である。革命後の中国農村において水利の基盤整備が行われた影響を取り除いてみた場合の姿を、さしあたり「伝統的」水利として探ってみたい。革命以前の伝統中国には、私たちが想像する以上に古い時代の姿が残されていたように考えられる¹⁾。そこからはるか彼方の稲作の展開と都市との関わり合いの一端を考える手がかりを得ることができのかもしれない。一方、そうした伝統的灌漑水利が今日に至る過程でどのように変化してきたかを探ることによって、対象地域をめぐる社会の動きと環境との関わり合いの変化の意味について理解することがで

1) 梅原 猛は、7,000年前の河姆渡遺跡で、洪水にあった民家が発掘され、その土間のとこ稲の束があったのをみて、次のように述懐されている。「日本の農村、私の育った愛知県知多半島の農村も同じことでして、……私はとたんに子供の頃のことを思い出しました。しかも機織りの機械がたくさんあって、どうも土器に蚕のことなんかが書いてある。私の子供の時も稲作と養蚕なんですよ。7,000年も前に、私の育った日本の農村とほぼ同じ、あるいはそれよりも高い文化があったということに驚嘆しました」(梅原・巖・樋口 2000: 14-15)。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第2章 長江中流域

— 滎陽平原・城頭山遺跡周辺の灌漑水利変容 —

はじめに

図2-1は現在から過去1万年以前ごろまでの、中国大陸における気候変化と歴史文化の状況、および長江流域における代表的な早期都市文明の成立時期とを対比したものである。気候的には寒冷期に当たる新石器時代に稲作農耕が誕生している。そして暖候期に入る8,000年前ごろから、黄河流域では仰韶文化、竜山文化、周商夏という先史時代が進展していたとき、長江流域においても大けい文化(中流)、良渚文化(下流)、三星堆文化(上流)が発生していた。戦国時代

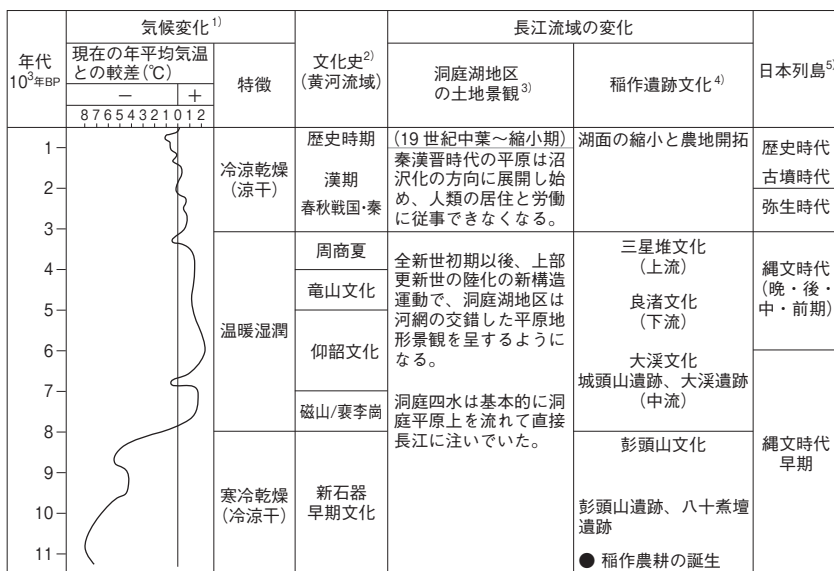


図2-1 中国大陸における気候変化と稲作文化

注：1) 2) 周(2007: 図6)、3) 小出(1987)、4) 梅原・安田(2004: 年表)、

5) 日本第四紀学会編(1977: 附 I-5)

このプレビューでは表示されないページがあります。

第3章 長江下流域

——太湖平原・良渚遺跡周辺の灌漑水利変容——

はじめに

長江下流域の、江蘇省、浙江省、上海市にまたがるデルタ地域(以下、「長江¹⁾デルタ」と呼称)では、すでに新石器時代後期の段階に「良渚文明」と呼ばれる初期文明が誕生している。歴史時代に入ってから、いわゆる「江南文化」として名を馳せ、さまざまな生活および産業文化を生み出してきた。しかも今日では上海をはじめデルタの全体が、「都市化する中国²⁾」を象徴するような方向で著しい変化を遂げ³⁾、中国経済の牽引者として重要な役割を担うようになった。

長江デルタにおける近年のこうした変化にはこの30年来の「改革の時代の偉業」と新たな「世界経済の枠組み(グローバリゼーション)」、すなわち政治・経済的な状況の変化が大きく関与してきた。しかし、歴史的に培われてきた「内発的な力⁴⁾」も無視し得ない。内発的な力とは広大なデルタを水田化し、歴史時代の早期の段階で「江浙熟すれば天下足る」といわれるような食糧基地に変え、同時にデルタの低湿な土地環境の下で独特の農村や都市集落を発達させ

1) 本章では、良渚文明と良渚文化という2つの用語を併用する。ただし、前者については「良渚文明」と括弧書きで使用する。

2) 例えば、ジョン・フリードマン(谷村 訳 2008)。

3) 著者が1985年にはじめて上海を訪れたとき、目抜き通りの南京東路の景観は旧租界時代のコンクリートの建築物で特徴づけられ、裏側は木造の古びた住宅と人混みが印象的であった。ところが今日の近代的なオフィスタワーやホテル、マンション、立体化した交通路などによって彩られた都市景観に接すると、世界都市を連想させられる。こうした景観は上海だけではなく、蘇州市やその他の都市、あるいは農村住宅のカラフルな景観を含め、デルタの各地に拡大しつつある。また高速道路や高速鉄道の整備に加えて、工業団地の開発が各地に進んでいる。

4) 上掲2)の著者は次のように指摘している。「グローバリゼーションを分析の枠組みに取り入れると、国内的な視座、歴史的な歩み、そして内発性がなおざりにされるほどに外的な力学が特別扱いされる嫌いがある。また、社会・文化的、政治的変数が除外されるほどに、経済的側面が重視される」(谷村 訳 2008: 16)。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第Ⅱ編

土 地

人口圧と農地開発／都市化と土地資源問題

このプレビューでは表示されないページがあります。

第4章

人口と農業・土地資源の関係

はじめに

本章では、次章以下で改革開放政策以降に大きな問題となる土地資源問題、とくに耕地減少問題に触れる前提として、3つの点について概観しておきたい。第1は社会主義革命後の人口増加問題と農業の役割の重要性について指摘する。第2には歴史的に見たときの人口と農業との関わりについて、国際的な比較をまじえて中国の位置を概観する。第3には経済改革に伴う地域間格差と人口流動についてである。人口と農業・土地問題との関係は、決して単純な関係ではない。ボズラップ(安澤訳 1975: 序論)が指摘したように、人口成長、農業技術の変化および土地改革は、一つの複合した問題に関わる異なった諸側面として考察しなければならないし、その中で人口成長は独立変数として農業発展の主要な決定要因になる。実際、人口の増加が土地に対して圧力となることは自明のことである。本章では、経済改革以降の人口流動がもたらす新しい人口圧の背景について検討する。

第1節 人口と農業との関係

1. 革命後の人口急増——1990年代

中国の人口は1998年4月に11億人に達した。しかしこのうち半数は革命後のほぼ40年間に増加した人口である。この人口の増加が今日の中国に対していかに大きな影響を及ぼしているかを示すため、まず中国の人口史を概観してみよう¹⁾(後掲、表4-1)。中国で最初に人口調査が行われたといわれる西暦2年(西漢元始二)の人口は、既に5,900万人に達していた。しかしそれ以後、中国

1) 趙(1984)論文および『中国統計年鑑』による。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第5章

経済改革初期段階の土地資源問題

はじめに

中国では農村改革を基軸としてはじめられた経済改革の過程で、農村を支える土地基盤である農地(とくに耕地)保全に対する関心が高まりを見せるようになる。本章では改革以来1990年代半ば頃までの、いわば経済改革初期段階の耕地資源問題がどのような状況を呈していたのか、その背景となった要因と特徴について明らかにしよう。しかし、その前に耕地をめぐる歴史的な傾向について概観することによって、改革期の耕地問題の特徴の新しい点を明確にしておきたい。

なお、中国の耕地動向を全国的に把握するためには統計数値を利用しなければならないが、統計的な手法の変更¹⁾があって、必ずしも本章で扱う統計数値は、統計方法の変更後の今日の数値とは連続性を持たない。本章で述べる統計では改革期以前から耕地は減少を続けていたが、新たな統計方法のもとでのスタート時点の耕地統計では、第6章で示すように、さらに増加したところから減少に転ずる形となっている。したがって、本章では、両者の整合性を図ることは統一せず、経済改革の初期段階における耕地問題の新たな特徴を確認することとしたい。

第1節 過去における土地(=耕地)資源問題

グリッグ(1977)は中国について、前章で見たような耕地と人口の関係の歴史

1) 中国の耕地面積に関する統計方法は1996年を境に変更となった(日本総合研究所 2000)。「中国耕地資源数量変化の傾向分析とデータ再建：1949～2003」(自然資源学報 2005年 第一期)を参考と調整された。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第6章

経済成長期の都市化と土地資源問題

はじめに

中国の経済は、1990年代後半頃からとりわけ2001年のWTO加盟以降、急速な経済成長を遂げ今日に至っている。経済成長期に入ってからの特徴は都市化が進み、それに伴い、土地資源対策も重要な問題となってきた¹⁾。日本の場合、明治以来の近代化の過程で、日本の農地(=耕地)面積は3つの段階、すなわち増加、停滞、減少というプロセスが進行した(元木 1992、1998)が、その一方で農地の減少が著しくなった段階には日本の食糧自給率は先進国の中でも最低レベルに低下してきた(元木 2006)。この時期は日本の経済が高度成長を遂げ、農村から都市への人口移動による都市化とくに特定大都市への人口集中化が大きな特徴となった。農地面積の潰廃や放棄は都市化と密接に関係していることに鑑みると、今日の都市(経済)文明の発展は農地の減少との交換の上に成り立っている、と言っても過言ではない状況が生じている。もちろん、こうした事態については、日本のみの経験というよりは世界経済のグローバリゼーション²⁾下における現代の都市文明に対する批判的な問題意識に着目した

1) 野村・小賀訳(1996)『中国の土地法』、および曲・陳・陳(2007)『经济发展与中国土地非农化』に詳しい。

2) 「都市」は歴史時代を通じて、常に社会の中心に位置し、社会にダイナミズムを与えてきた存在である。しかし高度経済成長とともに巨大な人口を収容しつつ、広域的な影響を及ぼすようになった現代の都市と従来の都市には大きな違いがある。地理学者であり哲学者でもあるオギュスタン・バルク(1996)は次のように指摘している。「現代の都市(city)はそれ自体が何よりも文明(civilization)として人々の前に姿を現した」。その「環境に対する否定的な影響は不可逆的なものかもしれない、しばしば制御不能であり、地球上での人類の居住可能性をも危機に陥れている」。これまで「文明の進歩は善として受け取られていた」が、「それとはまったく別な見方が60年代に普及しはじめ、今日支配的となっている」。

日本においても、生態学者の吉良竜夫(1999)は、「すべての環境問題が、どれも一番激烈にあらわれているところ——それが都市である」、「そこへ人口が集中せざるをえない社会の

このプレビューでは表示されないページがあります。

第Ⅲ編

食 糧

市場経済下の産業構造調整と食糧生産地域の変容

このプレビューでは表示されないページがあります。

第7章

構造調整の概念と中国農業構造調整の プロセス

はじめに

「構造調整」の概念については、その明確かつ統一的な定義があるわけではない。広い意味では社会・経済のシステムがそれぞれ閉鎖的かつ自立的な系から、開放的かつ他律的あるいは相互的な関係へと変化する中で提起されてくる、経済的諸関係の再編成に関わる政策の一環と理解できる。今日的観点からは世界銀行・IMFによって主導された構造調整政策がよく知られているが、それは世界市場を意識したものである。ただし、その場合でも構造調整の目標と具体化は、それぞれの国情に応じて、歴史的な流れに規定され、方向づけられるものであろう。

実際中国では、1970年代末に開始された改革開放政策の中で構造調整という言葉がくりかえし使われ、今日に至っている。周知のように中国の農業構造は、旧来から主穀生産を主とした小農的経済としての特徴を有してきた。新中国成立後の土地改革と人民公社化は中国にとって一大変革ではあったが、それはあくまで生産関係の変革であって、農業経済構造と生産力の状況を改めるものではなかった(童 1980)。

第1節 農業構造調整の内容の多面性

その意味で1979年以來の経済改革は、長期にわたる中国の産業構造とりわ

1) 日本経済新聞社(1996)『日本経済事典』(p. 891)によれば、「構造調整」(structural adjustment)あるいは「構造改革」(structural reform)の用語は、“マクロ的な総需要調整政策以外の、ミクロ的に制度の仕組みを変更する経済政策を総称して用いられる”、と説明している。ここでは構造調整と構造改革を峻別せず、かつミクロ的に制度の仕組みを変更する政策と位置づけているが、本稿では必ずしもこれにとらわれず、できるだけ中国での使用例に則して「構造調整」の用語を使うこととする。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第8章

中国における食糧生産構造変化の特徴

はじめに

第7章でみたように、産業構造の調整下において食糧生産を含む農業構造の変化は地域的にはどのように展開したのであろうか。いわゆる中国経済が成長期を迎えるWTO加盟以降の最近の傾向については第12章で改めて扱うこととし、本章ではそれ以前の全国的な動向について概観しておこう。

本章ではとくに、改革開放政策以降における食糧生産の構造変化と生産量の向上、および中国の土地利用において骨格にある水稻、小麦、トウモロコシ生産の地域変化について検討すると共に、伝統的に食糧生産の分布に特徴を与えてきた南方と北方との関係がどのように変化してきたかについて傾向を整理する。

第1節 食糧生産の構造変化

一般的に、経済発展の過程では、土地利用上穀物のような伝統的な作物は後退し、収益性の高い商品作物に向かう傾向がある。中国でもこれは例外ではない。中国統計年鑑によると、農作物は穀物(米、小麦、トウモロコシ、大豆、芋類)、換金作物(例えば、ピーナッツや菜種油などの含油作物、棉花、繊維作物、サトウキビ、ビート=砂糖大根、タバコ、桑、茶、果物)、そして野菜を含むその他の作物、の3つのカテゴリに分類される。

中国全体の食料生産構造の変化の特徴を把握するため、まず表8-1を示そう。1978年から2001年に至る23年間における、農作物全体の播種面積と果樹および野菜の栽培面積の推移をみたものであるが、この表より農作物全体の播種面積は1,501.1百万ha(1978年)から1,557.1百万ha(2001年)となり、5,120万ha

このプレビューでは表示されないページがあります。

第9章

東北地区における食糧生産の地域的展開

はじめに

中国の食糧生産は、改革開放政策以降の農村改革の過程で著しい発展をみせた。しかし、これはあくまで全国平均的にみたときの傾向であって、地域的には、第Ⅱ編の第5章および第6章で明らかにしたように、南東部の沿海地域を中心とした工業化(都市化)地域と他の地域との間で激しい消長があった。その中で新しい担い手としての地位を高めてきた最も代表的な地域が遼寧、吉林、黒龍江の東北3省(以下、東北地区と略)であった。

本章では、まず、東北地区における食糧生産の特徴を中国全体の中に位置付けて確認し、つぎに東北内部における食糧生産の変動方向について明示するとともに、その典型的な事例が水稻作の北進現象にみられることを明らかにしたい。最後に、東北地区における食糧生産はWTO加盟直後頃から新しい課題に直面することについて考察する。

第1節 食糧作物生産への傾斜

中国の統計によると農作物は、前章でも触れたように糧食作物、経済作物、その他農作物に大きく3分類される。(1)糧食作物(以下、食糧作物とよぶ)は稲・小麦・トウモロコシ(玉米)などの穀物と豆類および薯類、(2)経済作物は綿花、油料(落花生=花生、油菜)、糖料(甘蔗=サトウキビ、甜菜)、煙草、桑葉、茶、果樹等、そして(3)その他農作物とは蔬菜、青飼料、緑肥などである。ここでは、まず、このような作物によって構成される土地利用の内容を土地利用構造と呼ぶこととし、それが東北地区においてどのように変化してきたかを、全国の場合と対比し明らかにする。対象とした時期は、農村改革が一段落した

このプレビューでは表示されないページがあります。

第10章

吉林省におけるトウモロコシを主とした 農業的土地利用形成の分析

はじめに

『中国土地利用』（呉・郭 1994）によれば、吉林省の土地利用は省の総土地面積 18.74 万 km² に対して、林地が 46.2% を占め、ついで耕地 21.3%、牧草地 12.8%、水面 5%、都市住宅および鉱工業用地 3%、交通運輸用地 1.3%、その他 10.4% である。耕地について 1998 年現在の状況をみれば、総面積約 4 万 km²、耕地率は 21.5% である。なお、耕地面積のうち畑が 88.4% (35,420 km²)、水田が 11.6% (4,630 km²) であるので、畑が卓越していることが農業的土地利用の基本的な特徴といえる。

現在の農業的土地利用の特徴を食糧作物の播種面積と生産量の面からみると図 10-1 のようになる。トウモロコシ(玉米)、水稻、大豆が主要作物であるが、トウモロコシと水稻に比べて大豆の地位は低いことがわかる。注目されるのはトウモロコシで、それぞれ総播種面積の 67% と総生産量の 76% で、圧倒的な地位を占めている。トウモロコシに次ぐ水稻も総播種面積の 13%、総生産量の 15% を占めている。したがって、両作物だけで総播種面積の 80%、総生産

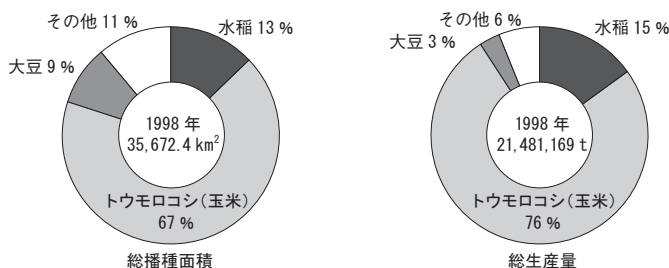


図 10-1 吉林省における食糧作物の播種面積と生産量
(『吉林省統計年鑑』1999 年より作成)

このプレビューでは表示されないページがあります。

第11章

黒龍江省における農業的土地利用の 展開と水稲作発展の意義

はじめに

黒龍江省こくりゅうこうにおける農業変化の著しい特徴は、トウモロコシと共に米作の飛躍的な発展がみられたことである。黒龍江省で米という場合は、もちろんインディカ系のものではなくジャポニカ系品種のことである。伊東(1997)によれば、中国では1990年前後から品質の向上を目指して、これまでのインディカ米からジャポニカ米へとどんどん切り替わっている。その変化は江蘇省や浙江省で著しく、また雲南省でも認められる。しかし中国でジャポニカ米の代表的な発展地域は東北の黒龍江省であった(Motoki 2004)。黒龍江省における稲作面積は1980年に22万haにすぎなかったが、1999年には156万haへと急速に拡大した。その結果、同省における米の生産量は年間900万tに達して日本の国内生産に匹敵する水準にまで向上してきている。このようなジャポニカ米の増産によって、東北地区では1980年代までのトウモロコシ、粟、高粱などの「黄色い主食」をほぼ完全に脱し、米と小麦粉の「白い食事」に切り替わった(山路1992)。

本章では、その実態について詳細な地域分析を進め、今後の発展条件と制約条件について考察する。なお、一般的には、三江平原の動向が注目されているが、ここでは普通の事例で発展をみた地域に注目することとし、三江平原については後述する。

第1節 水稲作を基軸とした急速な農業発展

図11-1は、黒龍江省における主要な農作物の栽培動向を示したものである。これによると、水稲が他のすべての作物に比べて、突出して著しい成長を見せ

このプレビューでは表示されないページがあります。

第12章

WTO加盟前後の食糧生産地域の 構造変化と課題

はじめに

2010年現在、中国における農作物の栽培面積（農作物播種面積に果樹と茶園の面積を加算）は、1億6,451万haで、全国の耕地面積1億2,172万ha（2009年末）の1.35倍に相当する。その種類別構成は図12-1の通りである。

図12-1によると、現在、中国において土地利用上最も主要な作物は糧食（食糧）作物であり、農作物全体の

67%（109,876.1千ha）を占め、次いで蔬菜（12%）、果樹（7%）、油料（8%）の順となっている。農業の3分の2が糧食生産に向けられている。また、食糧作物の面積内訳はトウモロコシ（30%）、稲（28%）、小麦（23%）で81%を占め、次いで豆類の（11%）、薯類（8%）となっており、いわゆる三大穀物が作物構成を大きく特徴づけている。

しかし、食糧生産は中国経済が急速に発展した1990年代以降、増加基調で推移してきたわけではない。各農作物の播種面積動向（指数）をみると（図12-2）、2000年代以降、食糧作物は1980年代の水準以下で推移している。反面、急成長しているのは果樹、蔬菜、茶などの穀物以外の作物である。また近年では油料や糖料は微増傾向を示し、逆に麻類をはじめ棉花と煙葉（タバコ）には減少傾向がみられる。このように中国ではWTOへの加盟前後から農作物間の消長が強く現れ始め、今日に至っている。

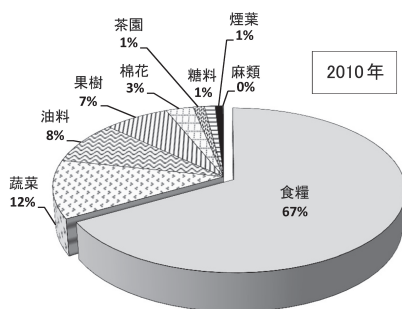


図12-1 中国における農作物播種面積構成
（『中国農業年鑑』より作成）

このプレビューでは表示されないページがあります。

第Ⅳ編

環 境

急速な経済成長に伴う社会の変容と地域環境問題

このプレビューでは表示されないページがあります。

第13章

経済成長と低地帯の水汚染問題の生成構造

——長江デルタ——

はじめに

長江デルタは、上海とその後背地を中心としたメガシティとして成長し、北京-天津-唐山地域や珠江^{しゅうこう}デルタとともに中国の経済成長を牽引する役割を担っている。しかし、こうした巨大化した都市地域の形成は、他方で環境問題や貧困問題を生み出しつつ展開している。長江デルタの場合、デルタを構成し、特徴づける水環境がこの間に急速に悪化し、その影響は陸域から海域にもはっきりと現れるようになった¹⁾。

本章ではまず、長江デルタの経済成長と地域変化の構造を明らかにした上で、水環境の汚染問題に注目してみよう。なお、ここで長江デルタとは行政的には上海市、江蘇省、浙江省とし、具体的な水環境問題の検討にあたっては上海市、蘇州市、嘉興市の3市を対象とした。また水環境問題の検討にあたっては、とくに農業変化に起因した面源汚染問題に重点をおき、かかる問題がどのように生成されるのか、について考察する。

第1節 長江デルタの経済成長と農業・農村の変容

1979年に始まる中国の改革開放政策、すなわち経済改革の中であって、長江デルタはその当初から今日みるような経済発展を遂げてきたわけではない。上海市、江蘇省、浙江省の3市省の産業分類別生産額の動向をみると、経済発展がはっきりと確認されるのは1990年代以降のことである(図13-1)。それ以

1) 中国環境年鑑2010によれば、中国の沿岸海域の水質は汚染が進み、2000～2009年の状況でも大きな改善がみられないまま推移している。海域を渤海、黄海、東海、南海に区分してみた場合、長江デルタの前面にひろがる東海の汚染が突出している。最近6年間(2005～2010年)の傾向は、東海のみが海水の重度汚染域を拡大している。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第14章 乾燥世界の地域変容と水利競合

—新疆ウイグル自治区のオアシス—

はじめに

中国の周辺地域は、漢民族世界の中心をなす東部の農耕地帯からみると、歴史的には漢民族以外の民族が牧畜と農耕を基礎に生活を展開してきた乾燥の世界である。しかし、近年、中国の経済成長の過程で広域的な経済システムに組み入れられ、都市化や鉱工業開発、あるいは観光開発の動きが各地にみられる。もちろん全体としては農牧業区としての性格が強い。本章ではその代表的な地域として新疆ウイグル自治区(以下、「新疆」と略称)のオアシス世界に注目する。まず、新疆にあつて重要な位置を占めるオアシスの重要性と水との関係を明らかにし、つぎに最も水を多用する水田稲作とその維持機構について紹介する。最後にグローバル経済が浸透する中での水問題について、水と稲作との関連で新たな動向を明らかにする。

第1節 乾燥世界におけるオアシスの重要性

乾燥地域としての新疆ウイグル自治区は、中国西北部に位置し、総土地面積が166万km²(中国の6分の1、日本の4倍以上)に達する広大な地域である。中央部を東西に走る天山山脈は新疆を、いわゆる南疆と北疆に分け、北側のアルタイ山脈との間にジュンガル盆地、南側の崑崙山脈との間には巨大なタリム盆地をつくり、さらに天山山脈の東部にはトルファン盆地、西部には伊犁河谷が発達する(図14-1)。重要なことはこのような盆地が非モンスーンの世界として存在することである。降水量は年平均で約150mm程度という、いわゆる“水少地多”の地であつて、各盆地には広大な砂漠が発達する。このため、もともと自然のままでの農耕は容易ではなく、原住民は遊牧を主とし、農耕は副

このプレビューでは表示されないページがあります。

第15章

農耕社会の変容と牧畜社会の草原破壊

—新疆ウイグル自治区グルジャ県—

はじめに

本章では、前章に続いて、漢民族世界の中心をなしてきた東部の農耕地帯からみると周辺部に位置し、歴史的には漢民族以外の民族が牧畜などを基礎に生活を展開してきた典型地域として、新疆ウイグル自治区のグルジャ (Ghulja; 伊寧) 県をとりあげる。対象地域はオアシス世界とは異なり、農耕地帯と牧畜地帯が地形的・気候的な環境条件の違いのもとで、伝統的に棲み分け、異なった地域社会を作りあげてきたところである。しかし、経済改革が進む中で、とりわけ1999年頃からの「西部大開発」¹⁾政策以降食糧問題が解決されるにいたって、牧畜社会との接触が緊密化するにつれ、牧畜の基盤である草原破壊の問題が発生した。中国の内陸部(とくに周辺)は記述のように巨大な乾燥の地域や傾斜地が控えているのでこれまでも深刻な環境問題に直面することが予想されてきた(例えば、元木 1990、Sumil 1933: 244)のであるが、本章ではその具体例を提示し、実態を解明する。

第1節 グルジャ県の立地環境

事例としたグルジャ県は、自治区の首府ウルムチ市から西約700km、カザフスタン共和国との国境の町コルガス (Khorghas、霍爾果斯) からは約80km

1) 1999年6月17日、江沢民国家主席は以下のような西部地域開発の総合原則「西部大開発」を指示した。

- ①中央政府が移転支払いの方法で財政支援を行うこと。
- ②外国技術・外資の導入および利用も積極的に推進すること。
- ③西部に対する開発は、水資源の開発およびそれに対する有効利用を重点にすると共に、生態系を保全する自然環境の改善、教育および実用技術の普及、インフラの整備などの面から総合計画を立てて実行することである(馬 2000)。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第16章 棚田世界の地域変容と貧困化問題

—雲南省紅河自治州元陽県—

はじめに

中国の周辺地域には、前章でみたような西北部の広大な放牧地域とは異なる、南方の山間地帯において少数民族の人々が湿潤な環境を利用した棚田地帯(=世界)¹⁾が分布する。本章ではその典型事例として、雲南省南部のベトナムとの国境沿いの哀牢山脈の紅河自治州元陽県の地域変化を取り上げる。この棚田地帯は、焼畑との関連で注目されてきた哀牢山脈西側²⁾と対照的に、稲作起源論の立場からも注目すべき位置にある³⁾。ここでは、この棚田地帯について、棚田の分布と実態と棚田世界の構造を明らかにした上で、経済改革下の変容(貧困化)と観光化に向けた動向について考察する。

第1節 元陽県の立地環境

研究対象地域とした元陽県は、雲南省南部、北回帰線の南(北緯22°49′～と東経102°27′～103°13′の間)に位置し、紅河ハニ(哈尼)族イ(彝)族自治州

1) この地帯の棚田(中国では「梯田」)については、王(1999)、哥(2001)、紅河州哈尼学学会編(2001)、雲南民族学会哈尼族研究委員会編(1999)、李(1998)等による優れた研究成果が出版されるようになった。しかし、日本ではこの地域の棚田に焦点が当てられることは極めて少なかった。

2) 例えば、佐々木(1984)、尹／白坂訳(2000)。

3) 例えば、以下の指摘が注目される。「背後に深い森のある丘陵地帯では、谷筋に沿って乾期でもある程度湿地が見られるのである。乾期が強く現れる雨緑林地帯では棚田は難しい。一年生の野生稲が存在するような条件は、乾期が強く現れるところであり、そのようなところでは、湿地における根栽農耕も成立しがたいのである」「イネの株分けによる栽培化が、雲南省の亜熱帯地域から、北タイ、ビルマのシャン高原およびアッサムに至る広い地域において、普及したと考えてもよいと思う。そのような地域は棚田稲作として根づいたのではないかと思われる」(池橋 2002: 24-30)。

このプレビューでは表示されないページがあります。

終章

本書は、書名を『中国変容論』とした。その最も大きな理由は、今日の中国は変化・変容という見方を加えなければ、恐らくどのような観点からであれ理解することはできない、と考えたところにある。もちろん、変化の「相」は多面的であり、本書で扱った内容はそのごく一面に過ぎない。ただ、副題に示したように、人間生存に関わる最も基本的な「食の基盤と環境」に焦点を当て、その大きな枠組みと具体的な様相を検証することによって、変容する中国の実像にアプローチした。第Ⅰ編は中国の歴史時代を視野に入れて長期的な変容を、第Ⅱ編、第Ⅲ編、第Ⅳ編は主に今日の短期的かつ急速な変容に着目した。具体的には中国の「水」「土地」「食糧」「環境」に関わる事象の変化について、16章に分けて実態を紹介した。各章の論点に対する結論はそれぞれのむすびに示した通りである。

終章では、各編の総括として、変容する中国を理解する上で基本となる特徴を確認し、併せて日本との比較をふまえ、将来に向けた若干の知見について記しておきたい。

第1は、中国社会を大きく変容させる契機となった改革開放政策(=現代化政策)は、明治以来の日本の近代化のプロセスと異なって、経済のグローバル化が急速に進んだ時代に実現してきた点である。中国の歴史に照らしてみると、この変化は人民公社の時代をも含めたそれ以前の歴史時代全体と、歴史を二分することができるほど大きなものである。第Ⅰ編を通して見たように、経済改革以前の歴史時代は、ゆっくりとした変化の時代であった。この間に、人々は土地自然への働きかけと、自然からの反作用のもとで試行錯誤を繰り返し、地域に応じた生存の条件(知恵と技術)を確保し、それぞれの地域の限界に近いところまで開発を進めてきた。その姿は長江流域における古代都市文明の発祥地周辺における、水利の環境史(技術の展開)およびその地域差として確認

このプレビューでは表示されないページがあります。

索引

索引における中国語の取り扱いについては、日本語の音読みが一般的に通用している文字はそれに従い、それ以外の日本の音読みが一般的ではない文字については中国の拼音(pinyin)を参考に配列した。

事 項	
あ	
哀牢山地の地形	320
あきたこまち	287, 288
アキヒカリ	287
新しい価値観	338
亜熱帯山地の棚田	326
アルカリ土壌地帯の水田化	234
家新嘗	329
育苗・田植期の灌漑水確保	74
以沙圧碱	236
イ族	321, 327, 330, 335
囲田	104, 105
稲作	20, 52, 58, 187, 196, 198, 232, 233, 236, 239, 266, 279, 331
——の機械化	233
——の季節出稼	232
——の潜在的な可能性	239
——の北進現象	196, 198
——を制約する要因	239
——をはじめた効果	236
稲作アジア	26
稲作起源論	319
稲作文化の起源	90
稲作文明社会	29
稲	182, 189, 191, 193, 239, 245, 256, 259
ウイグル族	283, 284
——と漢族との人口比	283
——の伝統食	284
鵪飼い	38
圩田	94, 104, 105
ウルムチ川の水量の減少	288
ウルムチ市の都市化	288
運河建設	94
雲霧沢	62
雲霧山城	336
鉞	89
沿海部と内陸部	124
沿海部の都市域	134
塩化現象	108
堰塘	72
オアシス	279, 280, 283
——の土地利用	283
王家廠ダム	70, 76
大型家畜の放牧の規制	315
大型トラック	310
温水ため池	257
か	
海外の資源確保	161
改革開放政策	116, 167, 181, 186, 263, 265, 341
海水の重度汚染域	263
開拓建設兵団	287
開田	229
開発圧力	317
解放前の稲作	74
価格政策	239
化学肥料使用量	184, 268, 270
——の地区別推移	270
革命後の人口増加	118
嘉興市	263, 268, 270, 277
——の経済発展	274, 275
——の水資源利用状況	276
——の地域変化	274
火耕水耨	103, 104
河水	282

このプレビューでは表示されないページがあります。

初出一覧

本書作成の基になった論文の初出は、序章と終章を除いて各編別に列挙すると以下の通りである。掲載に当たって各論文の内容は改変・再構成した。

第Ⅰ編

- 「城头山遗址周边水田先址环境与传统的水域利灌溉系統—关于长江中游地区套作的基础研究」、何介鈞・安田喜宪(主編)『澧县城头山—中日合作澧阳平原环境与有关綜合研究』、文物出版社(北京)、135-147(2007)
- 「長江流域の環境史(1)—成都平原・三星堆遺跡周辺の灌漑水利変容—」、経済学季報(立正大学) 59(4)、87-120 (2010)
- 「長江流域の環境史(2)—澧陽平原・城頭山遺跡周辺の灌漑水利変容—」、経済学季報(立正大学) 61(1)、41-71 (2010)
- 「長江流域の環境史(3)—太湖平原・良渚遺跡周辺の灌漑水利変容—」、経済学季報(立正大学) 61(1)、25-62 (2011)

第Ⅱ編

- 「中国の農村改革—その意義と農村経済に与えた影響—」、歴史と地理 407、1-11(1989)
- 「中国の農業と人口」、『地球規模の環境問題Ⅱ』(講座《地球環境》第2巻)、中央法規出版、250-267 (1990)
- “An Overview of Chinese Farmland, 1949-1990”(Jinsheng LIUと共著), *The Journal of Saitama University* (Social Science) Vol. 42, 1-12 (1994)
- 「中国における都市化と農地減少」、山下脩二(編)『現代の中国地理研究』(東京学芸大学)、31-37 (1999)
- 「現代都市文明と農地資源の交換—中国における急速な都市化が農地資源に及ぼす影響—」、経済学季報(立正大学) 62(4)、17-48(2013)

第Ⅲ編

- 「中国東北地区の稲作概観—東北平原南部の土地利用調査—」、LU/GEC プロジェクト報告書V、99-109 (1999)
- 「吉林省における農業的土地利用の形成と地理的諸条件」、LU/GEC プロジェクト報告書VI、142-156 (2000)
- “Changes in the Structure of Agricultural Land Use in Northeast China, with Special Reference to the Role of Rice Paddy Production”, K. Otsubo(ed.), *Study on the*

このプレビューでは表示されないページがあります。

著者紹介

元木 靖 (もとき・やすし)

1944 年 茨城県生。

1968 年 東北大学理学部地学科地理学卒業。

東北大学大学院理学研究科(修士、博士課程)、日本学術振興会奨励研究員、

埼玉大学教授(1987 年)を経て、埼玉大学名誉教授(2009 年)、博士(理学)。

現在、立正大学教授(経済学部)、独立行政法人国立環境研究所客員研究員。

著 書

『現代日本の水田開発——開発地理学的手法の展開——』古今書院(1997 年)

『食の環境変化——日本社会の農業的課題——』古今書院(2006 年)

『地域の科学——水と地域のかかわり合い——』(分担)古今書院(1984 年)

『関東 I・II——地図で読む百年——』(共編)古今書院(2003 年)

『荒川下流誌』(共著)山海堂(2005 年)

Modernizing China: Its Land, Food, and Environment

ちゅうごくへんようろん

中国変容論

食の基盤と環境

発行日 ————— 2013 年 5 月 31 日 初版第 1 刷

定 価 ————— カバーに表示してあります

著 者 ————— 元 木 靖

発 行 者 ————— 宮 内 久



海 青 社
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>
郵便振替 01090-1-17991

● Copyright © 2013 ● ISBN978-4-86099-295-8 C3036 ● Printed in JAPAN
● 乱丁落丁はお取り替えます

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-86099-949-0(PDF)